

# 産業革命期における大地主の動向

— 千葉県の大地主と製糸業・銀行業との関係 —

池 田 宏 樹

## Activity of the great landowner in the Industrial Revolution period.

Relation between the silk-reeling /banking with the great landowner of Chiba Pref.

Hiroki IKEDA

### Abstract

Although I have not been paid attention to the difference expanded in the Industrial Revolution period in the history academy heretofore I announce the actual condition with the case of Chiba Pref. I want to touch about the relation between the silk-manufacturing industry with the great landowner. I want to point out the weak point, beside I announce that the great landowner advanced to banking activity. I want to examine the influence of the financial in 1900 years and 1907.

### キーワード

産業革命期、千葉県、大地主、製糸業、銀行

## 1 はじめに

横山源之助は『日本の下層社会』を1898年に、また『明治富豪史』を1910年に出版しており、産業革命期における近代日本の格差拡大に注目していた。<sup>(1)</sup>

しかし今日の歴史著述においては松方デフレの影響には注目しているが、産業革命期に格差が如何に拡大するかについては余り追究にされていない。地域社会は大地主の台頭によってどのように格差が拡大していたのか。また当時の日本輸出最大の産業であった製糸業に大地主はどのように関わったのか。<sup>(2)</sup> さらに日本資本主義の発展に牽引車の働きをした銀行業に対して大地主はどのように関わっていたのか。<sup>(3)</sup> これらの課題を千葉県の場合を取り上げて追究してみたいと考えるものである。

注)

- (1) 横山源之助『日本の下層社会』(岩波文庫)、同『下層社会探訪集』(現代教養文庫)、同『明治富豪史』(現代教養文庫)

ばかりでなく、1893年の松原岩五郎『最暗黒の東京』(岩波文庫)や1907年の山路愛山『現代金権史』(現代教養文庫)があって、時代の先覚者たちは早くから産業革命期の社会変化に注目していたのである。

- (2) 『千葉県史』(明治編、1962年)、『千葉県史』(大正昭和編、1967年)、『千葉県の歴史』(通史編・近現代Ⅰ、2002年)には千葉県の製糸業を取り上げているが、大地主との関係には触れていない。

- (3) 銀行について前掲『千葉県史』(明治編、508～626頁)は制度の変遷を中心に上げている。前掲『千葉県の歴史』(通史編・近現代Ⅰ、689～706頁)では野田商誘銀行と小見川農商銀行の株主に触れているが、大地主との関係には触れていない。『袖ヶ浦市史』(通史編Ⅲ・近現代、2000年、101～103頁)では「地主の農外投資」として大地主が銀行に関わっていることに触れている。

## 2 格差拡大と大地主の台頭

産業革命期に日本社会はどのような格差が生じてい

たのであろうか。表1は衆議院議員選挙資格者名簿から作成した納税額の階層表である。<sup>(1)</sup> 1902年では1,000円以上の納税者は3名しか存在しなかったが、1908年32名、1912年37名、1916年39名で、特に1908年以降1,000円以上から5,000円未満の階層で増加が著しい。1902年の最高納税者は東葛飾郡野田町の茂木七郎右衛門4,404円であり、1912年も同人がトップであったが、納税額は1万8905円と約4.3倍に増大していた。一方、10円未満の納税者は1902年85.3%、1908年以降は78.3、78.9、78.7%とほとんど変わっていない。これまでの研究では貧富の差の拡大は1880年代の松方デフレ期を問題とすることが多かったが、実態は19世紀末から20世紀初頭の時期の方が格差の拡がりが大きかったものと考えられる。

千葉県の小作地率の変化を見ると、1887年43.3%、

1897年46.5%、1901年48.3%、1906年49.1%、1911年48.9%であって、19世紀末から20世紀初頭にかけて小作地率が増大しており、千葉県ではこの時期こそ地主制が大きく伸長していたことが分かるものである。<sup>(2)</sup>

それでは、その地主制が拡がる中で、大地主は県内にどのように存在していたのであろうか。1898年の「千葉県多額納税者及大地主」によれば、地価1万円以上者を大地主と判断しており、167名をリストアップしている。<sup>(3)</sup> けれどもこの表では君津郡の部分は各人の地価が記入されておらず、実態を必ずしも的確に表しているものではない。そこで1902年の時が地租は3.3%であったから納税額333円以上の者を大地主と考えて前掲表1を見てみると、58名の存在が確認出来る。その後、日露戦争の非常特別税では地租が7.2%に増徴されているので、720円以上の納税者を該当者として見てみると1908年は60名おり、1912年には62名、さらに1915年は72名と増加していたのである。これを地域別にして大地主の存在を見れば、1902年は香取郡14名、東葛飾郡10名、君津郡9名であったが、1908年では香取郡14名、東葛飾郡12名、印旛郡9名となっており、また1912年では東葛飾郡15名、香取郡12名、君津郡8名、印旛郡8名となり、さらに1915年では香取郡18名、東葛飾郡14名、市原郡9名と変化していた。いずれにしても香取郡、東葛飾郡が大地主地帯の中心であったのである。

しかし1924年農務局調査の「50町歩以上者ノ大地主」では、千葉県の57名のうち印旛郡が13名と急増しており、香取郡12名、東葛飾郡10名の3郡に集中していて、産業革命期の大地主地帯とは異なる様相を見せていたのである。<sup>(5)</sup>

<sup>(4)</sup>

注) 五十嵐重郎編『房総紳士録』多田屋支店、1902年。凡例によれば「納税者は(略)直接国税拾円を負担し、衆議院議員選挙資格を有せる者なり(略)中途にして其方針を単に選挙有資格者のみに限る事に改めた」とし、10円以上の納税者を網羅するものとして作成されたものであり、1908年版、1912年版、1915年版、1920年版の5冊ある。今回

表1 税額による階層

	1902年	1908年	1912年	1915年
15,000円以上		1	1	1
10,000～14,999円				
7,000～9,999円		1	1	1
5,000～6,999円		1	1	1
4,000～4,999円	1	3	3	4
3,000～3,999円		1	3	3
2,000～2,999円		5	5	3
1,000～1,999円	2	20	23	26
900円～999円	2	9	5	8
800円～899円	4	8	10	10
700円～799円	3	18	16	19
600円～699円	12	22	26	31
500円～599円	5	41	35	35
400円～499円	15	62	54	82
300円～399円	15	57	55	61
300円～349円	19	100	93	87
250円～299円	37	154	135	152
200円～249円	72	278	287	292
150円～199円	163	565	571	610
100円～149円	439	1,319	1,258	1,377
50円～99円	2,253	5,907	5,495	5,850
10円～49円	30,099	43,398	39,437	40,163
合 計	33,141	51,970	47,513	48,816
戸 主 数 (男)	222,672	239,211	225,164	228,740

注) 『房総紳士録』・『千葉県統計書』より作成

は1915年までの4冊を使用した。

- (2) 『千葉県議会史』第2巻、1969年、173頁。
- (3) 「千葉県多額納税者及大地主」、渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧（千葉編2）』所収、日本図書センター、1995年、  
るノ31頁。君津63名、香取23名、市原19名の3郡が中心である。
- (4) 「地租増徴問題」『国史大辞典』9、吉川弘文館、1985年、416頁。海上郡銚子町の岩瀬為吉は90町歩以上所有の大地主であったが、1912年の納税額は295円で、720円以上の枠に入らない。税額による区分では大地主の実態は掴み難い。
- (5) 農務局「50町歩以上ノ耕地ヲ所有スル大地主ニ関スル調査」、『日本農業発達史』7所収、中央公論社、1957年。1931年の「30町歩以上の地主名簿」（『千葉県の歴史』近現代・産業経済Ⅰ）では印旛郡74名、香取郡55名、東葛飾郡53名で1924年の傾向と変わらない。

本稿では大地主を地価1万円以上あるいは耕地を50町歩以上所有する者と考えて論を進める。

### 3 千葉県の蚕糸業動向

幕末の開国により生糸が日本の代表的輸出品となったことから蚕糸業は全国で注目されていたが、千葉県当局は養蚕についてどのように見ていたのであろうか。初代の柴原 和知事による柴原県政では「蚕卵紙ノ儀ハ此際迎モ上信陸羽等ノ右ニ出ル事不相成、随テ価格モ相劣候ニ付、所有ノ桑園不十分ノ向ハ可成糸繭飼立ヲ専ラトシ」と蚕種製造は先進地域に任せるという方針であった。<sup>(1)</sup> そして「桑蚕ヨリモ一切上等ニシテ、外国人モ之ヲ愛シ、其製額増加次第海外へ輸出モ相成、御国益ノ一端ニ付、管内大小ノ人民一般ニ飼養致タサセ度」と自宅での養蚕ではなく、山蚕やまかいでの生産を奨励していたのであった。<sup>(2)</sup> さらに「養蚕・生糸ノ事業ニ至テハ（略）一般勸奨ノ儀ハ経験ノ上、暫ク相見合」との方針を示した。<sup>(3)</sup> たしかに「養蚕の歴史は蚕の病気との闘いの歴史であった」といわれていたように大変な作業を伴うものであったが、柴原県政は一般農家の失敗を恐れて極めて養蚕に消極的な態度であったことが特徴である。<sup>(4)</sup>

柴原に代わって船越 衛まもるが2代目の知事となって展開する船越県政は様々な分野で殖産興業政策を推進した。

- (5) 養蚕業でも1881年県内3か所に養蚕伝習所を設置し、1か所15人宛の生徒を募集して伝習を行わせ、1882年には県内の養蚕調査を実施した。また1885年から県が主導して開催した勸業諮問会で板倉胤臣・片岡治躬・木村七平の3県議による建議を積極的に採用して、1887年に桑苗100万本を県下農家に貸与し、これは良好な成績を納めたといわれている。さらに1888年には新たに伝習所を県内5か所に新設し、1か所に50円の補助金も交付して、千葉県養蚕業の基礎を築いたが、このため後世には「千葉県養蚕業の父」と称せられたのである。<sup>(6)</sup>

船越県政とその後の県政の影響によって千葉県の養蚕業はどのように変わったのであろうか。前掲『千葉県蚕業家名誉鑑』によれば、1895年に県農会が設置され、同会は事業として蚕業奨励に取り組み、同年に県は蚕種検査規則を制定、県内8か所に検査所を設置して病毒検査を実施したので効果が大きい上がったと伝えられている。また1897年には伝習所生徒60名を募集し、3年間群馬・埼玉の養蚕社へ派遣しており、その費用に1人36円の補助を行っていた。<sup>(7)</sup> その効果であろう、当時の千葉県統計を見ると、1886年には桑畑が388町歩しかなかったが、1889年には1,401町歩に増加し、1897年には5,060町歩で、全国18位に上昇していた。桑畑の増大に伴って繭生産も1889年2,873石で全国28位であったものが、1897年には31,362石となって桑畑と同様の全国18位となっていたのである。<sup>(8)</sup> 1887年を100として1897年の主要な農産物の産額を比較すると、米77、製茶97、甘藷140、落花生164であるのに対して繭は1,459と他の農産物を圧倒する伸長を示していた。1887年と1906年の繭産額の比較では「千葉が37倍で第一である、次は和歌山が22倍」と伸長率は全国のトップだったのであり、これが千葉県の養蚕業の位置であった。<sup>(9)</sup>

このような養蚕業の発展を受けて千葉県の製糸業はどのような状況となっていたのであろうか。

製糸生産量は1889年が1,426貫で全国36位であったが、1896年には29,841貫となり、全国16位になっていた。この増大した中心は器械製糸によるものである。<sup>(10)</sup> 1902年の千葉県内の製糸工場の概要を示したものが表2

である。29社が稼働していたが、年間300日以上稼働は6社しかない。労働時間は12時間から13時間が大半であった。女工は14歳未満も雇用していたが、女工数は県内の全ての産業の中では最大であった。賃金は1日12銭から40銭で、平均25銭であり、年間所得にして50円程度

であった。

次に主だった器械製糸の経営者を見てみよう。君津郡小櫃村寺沢で総蚕社を営んでいた木村七平は1898年の前掲「千葉県多額納税者及大地主」の中に大地主として登場する。しかし1902年の税額が144円、1908年235

表2 千葉県器械製糸工場の概要

(1902年当時)

郡名	町村名	会社名	代表者名	税額	創立年月	動力源	稼働	労働	職工数		賃金(銭)		1909年
				(円)			日数	時間	男	女	男	女	存在
香取郡	古城村万力	安国社	宮応源右衛門	54	1887.5	蒸気力	200	12	13	40	20	20	
君津郡	小櫃村岩出	南総製糸所	鈴木市太郎	156	1889.7	蒸気力	262	13	7	67	28	23	○
山武郡	丘山村	小町製糸場	青山宇三郎		1892.5	蒸気力	150	12	1	30	25	20	
夷隅郡	大多喜町	佐久間製糸場	佐久間清三郎	23	1893.1	蒸気力	320	12	4	60	30	25	○
市原郡	鶴舞町田尾	錦玉社	江沢信次	206	1893.3	蒸気力	180	10	32	110	15	12	
夷隅郡	大多喜町	白鳥製糸場	白鳥喜一郎	50	1893.6	蒸気力	320	12	33	92	30	25	○
香取郡	山倉村新里	山田製糸場	鎌形彦次郎		1893.6	蒸気力	270	10	7	39	35	28	
山武郡	日向村椎崎	山本館	山本勘三郎	117	1893.6	蒸気力	200	12	6	41	30	25	
夷隅郡	上瀑村横山	信弘社	西尾宗三郎	38	1895.6	蒸気力	225	10	3	44	25	20	
君津郡	小櫃村寺沢	総蚕社	木村七平	144	1895.6	蒸気力	175	13	1	18	28	20	○
山武郡	大和村田中	金坂製糸工場	金坂兼松	45	1895.6	水力	200	11	27	38	16	12	○
山武郡	大富村富田	鈴木製糸場	鈴木重太郎	48	1896.4	蒸気力	300	12	2	35	25	20	
印旛郡	弥富村岩富	弥富館	檜垣久吉	47	1896.6	蒸気力	180	12	1	42		20	○
印旛郡	弥富村岩富町	松原製糸部	松原喜代助	72	1896.6	蒸気力	180	12		42		20	
印旛郡	公津村北須賀	土井製糸場	土井雅五郎	75	1899.5	蒸気力	180	10	3	31	25	20	○
山武郡	横芝町横芝	横芝共同製糸	伊藤晃敬	99	1899.5	蒸気力	200	12	55	144	40	35	
君津郡	小櫃村俵田	安藤製糸場	安藤要太郎		1899.6		218	13	3	35	20	15	○
君津郡	真舟村	神谷工場	神谷寅藏	35	1899.6	蒸気力	280	11		42	30		
夷隅郡	上野村	横山製糸場	横山栄藏	21	1900.4	水力	150	10	1	18		30	
山武郡	大網町	大網製糸場	大塚喜太郎		1900.5	蒸気力	120	10	5	57	30	25	
長生郡	茂原町	信弘社茂原	麻生周二		1900.5	蒸気力	335		54	160	20	25	○
千葉郡	誉田村誉田	三枝製糸場	三枝八十太郎	40	1900.6	蒸気力	250	12	1	59	30	30	
東葛飾郡	明村	小根本製糸所	吉場利右衛門		1900.6	蒸気力	295	12	26	63	30	20	
長生郡	茂原町	共新社	前橋寅藏	179	1900.11	蒸気力	350	12	30	50	30	25	○
市原郡	八幡町	錦玉社	御簾納源太郎	50	1901.2	蒸気力	300	10	4	39	30	15	
長生郡	帆丘町本納	山本生糸所	山本辰藏	22	1901.4	蒸気力	200	12	5	63	25	20	
君津郡	小櫃村寺沢	真崎製糸所	鳥海栄次郎	44	1901.6		200	12		15		35	
東葛飾郡	松戸町	江戸川製糸場	作田 潔		1902.2	蒸気力	180	12	5	75	33	25	
市原郡	養老村	島田製糸場	島田政吉		1902.11	蒸気力	200	12	2	21	20	20	
		29社							331	1570			10社

注) 『千葉県統計書』より作成

年、1912年227円であり、1万円以上の地価の所有者ではなかったと考えられる。木村は前述の県議として知事に養蚕奨励の建議を行ったばかりでなく、郷里の同志者松崎重郎右衛門、森三左衛門、鈴木市太郎と養蚕伝習を普及させた人物である。鈴木市太郎は1902年の税額こそ156円であったが、1908年572円、1912年671円、1915年690円、さらに1920年には1,009円となっており、大地主に近い存在であった。鈴木市太郎の長男が1897年県議となり、1902年に憲政本党の代議士となった鈴木久次郎であり、久次郎は進歩党、憲政会の千葉県の重鎮として活躍したばかりでなく、県輸出製糸同業組合長となって製糸業の発展にも尽力した。そして木村七平の長女が彼の夫人であった。<sup>(12)</sup>

市原郡鶴舞町の錦玉社経営の江澤信次は「私財ヲ投シテ年々教師ヲ聘用シ、共ニ組合（蚕糸業）内ヲ巡回シテ之レカ方法ヲ授ケラレルヲ以テ当業家中失敗ノ惨状ニ陥ルモノ実ニ僅少」と養蚕の奨励を行っており、「箕輪為治郎、今関弥惣治、今関六平、戸谷準吉、鎌滝重平等と共同して鶴舞町田尾に一大器械製糸場を新設し、錦玉社と称して長野・山梨等より熟練なる工女を聘し、地方工女の養成に従ひ、本県製糸事業の先駆としての範を示した」といわれた者である。<sup>(13)</sup>

ところで製糸業の発展に銀行業はどのように関わっていたのであろうか。製糸経営者と銀行の関係を見てみよう。山武郡横芝町の横芝共同製糸は吉岡幸蔵が1897年に創設した武射共同製糸に由来するもので、資本金3万円、1,500株発行（1株20円）の会社であり、1899年には伊藤<sup>てんたか</sup>見敬が社長となっていた。伊藤は武射商業銀行の頭取であり、横芝銀行、福岡農商銀行の取締役で、佐倉銀行の株主でもあり、4行の株を349株所持していた。<sup>(14)</sup> 前橋寅蔵は長生郡茂原町にあった製糸工場を譲り受けて共新社製糸場として経営していたが、彼は1900年に長生郡日吉村針ヶ谷に創設された日吉銀行の常務取締役で65株を所持していた者であった。前述の江澤信次は明治銀行、五井銀行、千葉商業銀行、日吉銀行、正信銀行、鶴舞銀行の7行で79株を所持していた。木村七平は千葉県農工銀行の監査役であり、久留里銀行の

株主で2行の所持株は158株であった。印旛郡弥富村の弥富館経営の檜垣栄三郎は1902年の税額は126円であったが、佐倉銀行の監査役で200株を所持していた。前述の鈴木市太郎は久留里銀行20株の所持者であったが、息子の久次郎は久留里銀行の頭取で100株を持ち、彼は他に木更津銀行・木更津貯蓄銀行・馬来田銀行・南総銀行で190株を所持していた。また1899年創業の君津製糸は会社として久留里銀行に10株を所持し、同製糸の取締役であった鈴木幾久も10株、さらに安藤製糸場の安藤要太郎が30株、真崎製糸所の鳥海栄次郎が25株を持っていたのである。さらに多古銀行では324人4,000株のうち、79人1,061株は蚕業組合員であったことである。

1906年6月に東葛飾郡我孫子町に長野県諏訪の合名会社林組の支店が進出し、女工240名を雇用して県下最大の製糸工場が誕生した。また1907年5月には大日本蚕糸会千葉支会が発足する等、この時期が千葉県製糸業の最盛期であったといえる。しかし1909年には1902年にあった器械製糸29社のうち、残っていたのは10社に過ぎなかった。そして製糸生産量も27,811貫で全国28位となり、後退が始まるのである。たしかに1914年には生産量が30,591貫となって過去最高を示すのであるが、全国順位はさらに下がって30位となり、1920年には39位で1880年代の順位に転落してしまっていた。

養蚕業はますます発展していたのに、それでは何故に衰退していったのであろうか。1つには千葉毎日新聞では「県経済に一大関係を有する斯業に対し、当局者は如何なる方針を採りつつあるか、余輩の見る所を以てすれば、殆んど対岸の火災視するに非ざるかを疑ふ、豈に不可思議の次第ならずや」<sup>(15)</sup>、また千葉新聞は「県下の各町村長が農家の副産業として、此の最も適せる蚕業に重きをおかず頗る冷淡の風あるは、吾人の常に遺憾とする所なり」<sup>(16)</sup>と県や町村の行政当局が奨励に積極的でなかったことが指摘されている。2つには新総房が「製糸の産額は総収繭高の約1割弱に当たり、繭の大部分は近府県へ販出」と指摘していたような状況があったことである。<sup>(17)</sup> 3つには「御県の繭にては優等糸は出来ません」と指摘があったが、製糸原料の

繭品質が悪かったことにあった。<sup>(18)</sup> 4つには「製糸業で工女問題ほど目今重且大なるものはあるまい。工女問題とは工女が欠乏である」、「思ひ切って賃銀を高むるにあらざれば、工女は愈々欠乏すると思ふ」といわれていたが、製糸女工の不足にあったことである。<sup>(19)</sup> 5つには「岡谷製糸会社も亦同地（我孫子町）に分工場を建設せんとしたのであるが、水量の少なきを恐れて茨城県の荒川沖へ転じた」、「茂原町の前橋氏の現工場は前の工場の水が不良なりしたために転じて新設」と水不足の問題であった。<sup>(20)</sup>

しかしそれだけではない。「当業者ノ失敗ハ多ク繭並ニ生糸ノ担保ニ因ス（略）当行ハ這般貸出ニ付テハ大ニ警戒ヲ厳ニシ、大凡時価6分ヲ以テ貸付額ト定メ、其方法ハ極メテ短時日ナル約束手形ヲ以テシタル」とあるように<sup>(21)</sup>、資金面を担当する銀行業との関係が久留里銀行、多古銀行、あるいは鶴舞銀行以外には直接的にはなかったことによるものである。また木村七平や鈴木市太郎・久次郎親子のように大地主に近い存在者が関わることもあったが、総じて大地主の多くが製糸業には関わらなかったことも大きな要因であった。

注)

- (1) 1875年3月19日「蚕種製造ノ儀ニ付達」『千葉県史料』近代篇 明治初期三、1970年、363頁。
- (2) 1875年4月20日「山蚕飼養伝習ノ達」前掲『千葉県史料』近代篇 明治初期三、1970年、368頁。
- (3) 1877年6月18日「養蚕方法ノ論達」前掲『千葉県史料』近代篇 明治初期五、1972年、85頁。
- (4) 滝沢秀樹『繭と生糸の近代史』教育社、1979年、158頁。
- (5) 拙著『日本の近代化と地域社会－房総の近代－』国書刊行会、2006年、117頁。
- (6) 千葉県立中央図書館蔵、松尾幸敏『千葉県蚕業家名誉鑑』、1898年、20頁。
- (7) 前掲『千葉県蚕業家名誉鑑』32頁。
- (8) 『第17回日本帝国統計年鑑』内閣統計局、1898年、418頁。
- (9) 千葉県立中央図書館蔵「千葉県蚕糸時報」第21号、1908年8月、2頁。
- (10) 1908年の生産量では18の器械製糸で15,129貫、座繰製糸と自宅座繰が4,952貫であった。
- (11) 前掲『千葉県蚕業家名誉鑑』156頁。
- (12) 『千葉県議会史』・議員名鑑45頁、前掲『袖ヶ浦市史』（通史編3・近現代）55頁。

- (13) 前掲『千葉県蚕業家名誉鑑』161頁、前掲『千葉県議会史』・議員名鑑166頁。
- (14) 千葉毎日新聞社編『房総人名辞書』1909年、12頁。
- (15) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉毎日新聞」（1905年8月19日）
- (16) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉新聞」（1907年5月3日）
- (17) 前掲千葉県立中央図書館蔵「新総房」1909年2月21日）
- (18) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉県蚕糸時報」第13号、1907年12月、9頁。
- (19) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉県蚕糸時報」第22号、1908年9月、6頁。
- (20) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉県蚕糸時報」第50号、1911年1月、8頁。
- (21) 千葉県立文書館蔵『株式会社山二銀行第貳期営業報告書』（1901年12月）

#### 4 銀行設立の急増と大地主

1887年の時点で千葉県には銀行が5行しかなかった。1896年には18行に増え、全国で18位であったが、1901年には僅か5年の間に一挙73行となって全国7位の多さに発展した。この間、銀行以外の企業は全国20位に止まっており、如何に多く銀行が設立されていたかが分かるものである。しかし設立されていた銀行の特色は1つに資本金が小さいことであった。1902年の払込資本金状況で見ると、70行のうち、5万円以下が34行、5～10万円未満20行、10～20万円未満13行で、20万円台1行、30万円台2行というものであった。2つには預金比率が低く、1903年では1行平均70,885円で全国31位であったが、1908年に180,238円となって17位に上昇している。逆に預貸率は高く、オーバーローン状態は日露戦争時まで続き、1911年に漸く全国32位の低さに落ち着くのであった。<sup>(1)</sup>

それではこれらの銀行はどのような人々によって設立されていたのであろうか。

1899～1902年にかけて株主名簿の分かる59行のうち、50株以上の所持者比率を見ると、第九十八銀行は1883年に安田善次郎が同行の大株主になって以来の安田系銀行で、当時合資会社安田銀行が1,202株で筆頭株主という特殊なものであったが、他銀行は80%3行、70%5行、60%9行、50%10行で、半数近くの銀行では50株以上者



で占められていた。なかでも野田商誘銀行は9人の役員だけで5,000株中3,175株を、また佐倉銀行も役員8人で2,000株中1,200株を握っていた。個人の筆頭株主で巨大な所持者は総房中央銀行2,000株、野田商誘銀行1,380株、成田銀行1,020株、佐原興業銀行1,000株で、少数者で銀行を支配する形態であった。さらに成田銀行や佐倉銀行では株主に東京の在住者が多く、前者が42%、後者が35%も占めており、さらに成田銀行では地元の成田商人よりも佐原出身者が多く、地元根付いた銀行の性格を持っていなかったことである。

表3は1902年の場合に地価1万円以上者（大地主）がどのように銀行株を所持していたものかを示したものである。67人中56人が所持していたのであり、その内訳は7行に株を所持する者1人、4行5人、3行8人、2行16人、1行26人であった。しかも100株以上を持つ者は36人で、全体の53.7%であり、大地主の大半は銀行の大株主であったことが明確である。香取郡佐原町の菅井与左衛門は佐原興業銀行の頭取であり、同行株を1,000株所持していたが、同行の1901年上半期の配当金は4,375円であり、100円に付3円50銭で年間7分2厘の配当率であった。1株が50円であったから、菅井は50,000円の投資をしていたのであり、半期で1,750円、年間では3,500円以上の配当を得ていたのである。1903年の千葉県労働者の1日平均賃金が39銭であったから、彼らは365日フルに働いても年間142円程度にしかならなかったものであり、その所得格差は非常に大きなものであった。<sup>(2)</sup>

表3 地価1万円以上者と銀行

氏 名	郡	町 村	税額	行数	株数	主な銀行役員名
磯野 敬	夷隅郡	総野村	386	1	2000	総房中央銀行取締役
茂木七郎右衛門	東葛飾郡	野田町野田	4404	3	1528	野田商誘銀行頭取
菅井与左衛門	香取郡	佐原町	608	3	1243	佐原興業銀行頭取
馬場善兵衛	香取郡	佐原町	653	2	750	佐原興業銀行取締役
北川安左衛門	香取郡	佐原町	707	2	705	佐原興業銀行取締役
八木慶太郎	香取郡	佐原町	350	4	604	佐原興業銀行取締役
島海才平	君津郡	飯野村二間塚	408	2	580	南総銀行頭取
五十嵐敬止	香取郡	多古町	869	3	528	千葉農工銀行頭取
茂木房五郎	東葛飾郡	野田町野田	1314	2	500	野田商誘銀行取締役
茂木七左衛門	東葛飾郡	野田町野田	※ 4195	1	500	野田商誘銀行取締役
高沢金兵衛	君津郡	久留里町市場	771	4	490	久留里銀行取締役
篠原蔵司	山武郡	東金町堀上	634	7	445	成東銀行監査役
丸 方	夷隅郡	東村長志	672	2	415	夷隅銀行取締役
高梨兵左衛門	東葛飾郡	野田町上花輪	※ 5534	1	395	野田商誘銀行取締役
吉岡七郎兵衛	印旛郡	中郷村和田	492	3	383	成田銀行監査役
小森半助	香取郡	佐原町	343	1	353	佐原興業銀行取締役
藤江謙吉郎	印旛郡	安食町北辺田	987	1	347	成田銀行取締役
山下平兵衛	東葛飾郡	野田町野田	693	1	300	
鈴木清三	君津郡	富岡村下郡	363	3	266	久留里銀行取締役
千葉弥一郎	長生郡	鶴枝村上永吉	640	4	252	
前島治平	山武郡	東金町台方	348	3	246	松尾銀行取締役
西村千秋	印旛郡	八街町八街	757	1	200	
多田庄兵衛	香取郡	笹川村須賀山	641	1	200	
海老原善太郎	印旛郡	本埜村龍腹寺	426	4	198	
秋山源兵衛	安房郡	北条町	358	2	188	安房銀行監査役
島海清治	安房郡	東條村	402	2	187	安房銀行取締役
藤平量三郎	君津郡	久留里町市場	442	4	185	
平山皋次郎	香取郡	古城村鍋木	673	2	170	北総銀行取締役
藍野祐造	夷隅郡	東海村若山	389	1	167	夷隅銀行取締役
元吉和之	市原郡	海上村宮原	427	2	158	
長谷川利左衛門	印旛郡	成田町	566	1	140	大日銀行頭取
飯塚国三郎	山武郡	大和村山口	330	1	117	
半場 孝	夷隅郡	中川村行川	361	2	100	
茂木啓三郎	東葛飾郡	野田町野田	※ 445	1	100	野田商誘銀行相談役
平山勘兵衛	香取郡	多古町	444	1	100	佐原興業銀行監査役
大塚源五右衛門	印旛郡	成田町	368	1	100	
宮城喜三郎	海上郡	船木村高田	367	1	90	銚子銀行取締役
田中玄蕃	海上郡	本銚子町	854	2	88	
勝又増之助	香取郡	東條村牛尾	403	3	85	
永井益夫	安房郡	吉尾村	439	1	80	安房銀行監査役
伊藤祐真	市原郡	海上村今富	392	1	67	
向後積善	香取郡	東城村夏目	516	3	65	
秋元三左衛門	東葛飾郡	流山町流山	879	1	63	
三須兵三郎	山武郡	大和村養安寺	363	2	55	
深井吉兵衛	海上郡	銚子町荒野	572	2	50	
穴沢寛司	香取郡	万歳村万歳	404	2	50	
浜口儀兵衛	海上郡	銚子町荒野	1750	1	50	
堀切紋次郎	東葛飾郡	流山町流山	875	1	50	流山銀行取締役
高橋泰治郎	香取郡	小見川町	374	1	50	小見川農商銀行取締役
菅谷伝右衛門	香取郡	万歳村溝原	362	2	40	
永野儀三郎	市原郡	戸田村上高根	598	2	30	
林 忠三郎	香取郡	吉田村南山崎	351	1	30	
川奈部佐五右衛門	東葛飾郡	船橋町五日市	923	1	20	
須藤福松	君津郡	馬来田村真里谷	621	1	10	
蒔 吉五郎	印旛郡	酒々井町	608	1	10	
小倉金右衛門	君津郡	小櫃村山本	467	1	10	

注) 税額は1902年、※は1908年の税額  
役員は1899年から1902年の各銀行営業報告書より作成  
株は1株50円で統一してある

大地主で銀行株を所持していなかった者は11人あったが、彼らが株式投資をしていなかったとは断定できない。1898年の前掲「千葉県多額納税者及大地主」に搭載されている君津郡根形村の原 新一郎は1891年22町歩余を所持していたが、1899年には鴻池銀行（85円余）、水戸商業銀行（308円余）、新橋銀行（243円）、日本蓄蔵銀行（10円余）、帝国商業銀行（6円余）と5つの銀行へ合わせて652円余を預金していたのであって、前掲表3は県内銀行に限定したものであり、大地主によっては県外の銀行だけでなく、鉄道その他の産業への投資があったと思われるからである。<sup>(3)</sup>

千葉県農工銀行は農工銀行法により設立されたものであり、1898年4月18日に開業した。発行した50,000株のうち、県庁が11,480株を取得していたので、同銀行の役員選任は知事の裁量が大きく影響した。初代頭取には大地主で貴族院議員であった香取郡多古町の五十嵐敬止が就任している。50株以上の所持者77人のうち、銀行役員が27人、また大地主が18人いた。知事裁量の関係で貴族院議員1名、代議士10名、県議9名、郡議7名と政治家が多く株主になっていたことも特徴であった。<sup>(4)</sup> 1899年の貸付先を見ると、112口256,666円のうち、製糸が15口65,800円で一番多く、次が開墾35口58,266円、醤油8口40,500円、養蚕17口32,050円の順であり、蚕糸業関係が最も多かったことを示していたのである。<sup>(5)</sup>

注)

- (1) この間の全国統計は前掲『日本帝国統計年鑑』による。
- (2) 前掲千葉県立中央図書館蔵「新総房」（1903年5月13日）
- (3) 前掲『袖ヶ浦市史』（通史編3・近現代）102頁。
- (4) 前掲『日本の近代化と地域社会』322頁。
- (5) 前掲千葉県立中央図書館蔵千葉県内務部第4課『第8回千葉県勸業年報』1900年、179頁。

## 5 2つの恐慌の影響

1900年恐慌は1900年4月頃から1901年5月頃まで経済不況が続いたことであるが、千葉県ではどのような影響が顕れたのであろうか。「経済界ハ近年不況ヲ訴へ、前年（1900年）下半期に於テ最モ甚シク、金融界亦迫塞ノ域ニ陥ルニ至レリ、千葉商業銀行ハ此金融界不況ノ圧力ニ堪ヘス、遂ニ破綻ノ止ムヲ得サルニ至リ、3月18

日ヲ以テ支払ヲ停止シタリ（略）県下各銀行ニシテ千葉商業銀行ト直接取引アルモノハ勿論其ノ然ラサルモ預金ノ取付ニ遭遇シ、実ニ容易ナラサル事態ヲ呈セルニ至レルモ、株式会社九十八銀行ノ如キハ千葉商業銀行ニ多額ノ預金アルノ故ヲ以テ、殆ント同一ノ運命ニ頻セントスルニ至レリ」と千葉商業銀行に大きな影響を与えたことが分かる。<sup>(1)</sup> 千葉商業銀行は1895年6月に開業されたもので、払込資本金が32万円余であり、350人の株主数は総房中央銀行に次ぐ2番目の多さであった。山武郡東金町の名望家であった志賀吾郷は1895年4月に「千葉商業銀行ニ10株ノ申込ヲナシ」と株主となっているが、県内の多くの大地主や名望家が同行の株主となっていた。<sup>(2)</sup> 1899年は上・下半期共に純益が10,000円以上あり、貸付に対する抵当の確保では無抵当率が1899年上半期26.6%、同下半期16.7%であって決して悪いものではなかったが、1901年は上半期が69.8%、下半期も67.3%と悪化していたのである。恐らく不良債権が増大していたものと考えられる。臨時休業期間は1901年3月18日から30日間としていたが、9月30日まで延長され、漸く10月から再開されたが、以後は毎期に損失が続いて、ついに1907年恐慌の中で破産したのである。小草畑銀行や正信銀行の役員であった市原郡平三村の島海又右衛門は千葉商業銀行株を100株所持していたが、同行の破産で「元金6,250円を損失」したといわれており、多くの大地主や名望家が損失を被ったものと見られる。<sup>(3)</sup> 1903年4月には旧経営陣（鈴木利兵衛頭取、市川石三常務、村田市平取締役）に対する私印盗用手形偽造行使詐欺事件の刑事裁判が開かれている。<sup>(4)</sup>

当時千葉県内では千葉商業銀行と並んで代表的な銀行であった成田銀行も恐慌のダメージを受けた一つであった。「成田銀行ノ臨時休業ハ10月11日ニ始マルモノナルカ、其モ茲ニ至リシハ東京支店ニ於テ行金私消ヲ発見シタルニ出タルモノナリト雖モ、同行ニ直接関係ヲ有スル成田鉄道株式会社ノ否運ト金融界ノ不況ハ既ニ内部ノ基礎ヲ危カラシメタルモノアルカ如シ、同行ハ県下ノ銀行ニ対シ取引僅少ナルヲ以テ、其影響頗ル輕微ナリシハ不幸中ノ幸ナリ」と指摘があったが、1902



年2月24日まで休業に追い込まれた。<sup>(5)</sup> 同行の営業報告書によれば、全体の回収困難金は25万4523円であったが、そのうち本店分は8万8618円に対して、東京支店分は16万2784円であり、その中には行員費消分5万2238円が含まれていた。そこで同行では役員の入替を実施し、頭取には小倉良則前代議士に代わって監査役であった印旛郡中郷村の大地主の吉岡七郎兵衛が就任した。そして東京支店を廃止した。指摘されていたように地元に根付いていなかった反省によるものであり、1903年下半年以降は黒字経営に転換していくことになるのであった。<sup>(6)</sup> 1900年恐慌の影響では他県への転出を含めて総房中央銀行、横芝銀行、鴨川銀行、大原銀行、房総農商銀行の5行が消えていた。

1907年恐慌は1907年3月から断続的に1908年6月まで続いた経済不況であり、「40年来（1907）の金融逼迫は41年（1908）に至りその極に達し、恐慌状態にまで進展、地方銀行休業が続出した」と伝えられており、千葉県内では千葉商業銀行を始め9行が消滅していた。<sup>(7)</sup> 前項で述べたように製糸業では1902年の29社が1909年には10社しか継続していなかったが、これは1907年恐慌の影響によるものだったのである。

さて、県内の銀行の弱点はどこにあったのであろうか。1つには、払込資本金が少ないことを既に触れてきたが、資本金50万円で当時県内有数の佐原興業銀行の場合でさえ「創立は明治32年（1899）11月にして設立後6か年なるの今日、その払込額は僅々12万5000円に過ぎざる也、12万5000円はその資本金に対して辛ふじて成立し得る即ち商法の規定によるの払込なり、資本金50万円而して6年の星霜を経てその払込高その4分1に過ぎず」と指摘されていた状況が克服されなかったことである。

<sup>(8)</sup> 2つには積立金・純益金が少なかったことである。積立金は一貫して全国35位以下であり、純益金は全国21位から26位にあったが、日露戦争後は30位以下に転落していた。純益金が1912年に10,000円を超えるのは千葉県農工銀行を含めて安房銀行、一宮商業銀行、木更津銀行、佐貫銀行、佐原興業銀行、第九十八銀行、千葉割引銀行の8行に過ぎなかったのである。3つには乱脈

経営や刑事事件を引き起こしていたことである。「その頭取以下重役の多くが銀行業に無経験にして、銀行本来の仕事が如何なるものなるかのわきまえ無きによるなり」<sup>(9)</sup> の指摘や「不始末不整理な経営であり、重役の専横私曲の経営で、監査役なる者ありと雖も、多くは只だ名義のみの監査役」<sup>(10)</sup> という実態であったことである。4つには地域経済の発展や地域住民の生活向上に貢献するものが少なかったことである。純益金が10,000円を超える8銀行のうちで、小口融資に重点を置いていたのは佐貫銀行<sup>(11)</sup> だけで、佐貫銀行以外は1,000円以上の大口貸付が60%以上であり、特に野田商誘銀行、佐原興業銀行は80%を超えていた。木更津銀行では100円未満の融資が一切無く、佐原興業銀行や野田商誘銀行も圧倒的に少なかったことである。<sup>(12)</sup> 大地主が銀行経営に積極的に乗り出したことは、小作料等で得た資金を資本に転化することで、資本主義の発展に大きな影響を与えるものであった。けれども千葉県の場合、銀行以外の産業が未発達の中で銀行だけが急増した背景には、主として配当収入を目的としたものが多かったのである。1901年に開業し、資本金25万円で大地主の多くを株主に持ち、株主数406人と県下最大を誇った総房中央銀行は1902年には早くも千葉県から撤退せざるを得なかったことはそれを物語る象徴的な事例であった。

注)

- (1) 前掲千葉県立中央図書館蔵『第12回千葉県勸業年報』1903年、31頁。
- (2) 志賀郁平氏蔵『吾郷居士手記吹塵録・巻三』（1895年4月11日条）
- (3) 前掲『房総人名辞書』102頁。
- (4) 前掲千葉県立中央図書館蔵「新総房」（1903年4月21日）鈴木が重禁固2年、村田・市川が重禁固15年の判決であった。
- (5) 前掲千葉県立中央図書館蔵『第12回千葉県勸業年報』1903年、31頁。
- (6) 前掲千葉県立文書館蔵『株式会社成田銀行第拾参期営業報告書』（1902年6月30日）、消滅した銀行は大多喜商業銀行、津田沼商業銀行、六軒商業銀行、山二銀行、福岡農商銀行、大網銀行、武射商業銀行、佐倉銀行であった。
- (7) 千葉経済大学総合図書館蔵『第九十八銀行六十五年誌』1943年、37頁。
- (8) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉評論新聞」（1906年6月20日）

- (9) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉毎日新聞」(1904年7月21日)
- (10) 前掲千葉県立中央図書館蔵「千葉毎日新聞」(1904年7月28日)
- (11) 『千葉銀行史』1975年、126頁。「昭和2年4月22、23日、全国の銀行がいっせいで休業したなかで、佐貫銀行は平常どおり営業した。重役藤平量三郎(時の県会議長)が銀行の休業は人心の不安をいっそう募らせるとして、休業に反対したためといわれる」のエピソードを紹介している。
- (12) 前掲千葉県立中央図書館蔵『明治43年千葉県統計書』、1912年、536頁。

## 6. おわりに

千葉県の蚕糸業では養蚕については産業革命後も伸長して、1922年に至っても産繭量では全国14位の地位にあった。印旛郡中郷村の吉岡七郎兵衛が「養蚕牧畜ニ熱心セラル牧場ヲ設ケ、牛馬ノ繁殖ヲ図リ、牛乳ヲ搾取シテ地方ニ販売ヲ為シ、又桑田ヲ購ヒ養蚕事業ヲ創ム、彼ノ小山牧場ト唱フルハ、君カ私設セシ者ナリ、自邸ノ傍ラニ宏大ナル蚕室アルハ君カ養蚕場ナリ、殊ニ養蚕ノ隆盛拡張ニハ尽力セラルスクノ如キ蚕室アルモ尚満足セス、近年ニ利根川ナル新川ト称スル所ニ蚕室ヲ新築シ、茲ニ又養蚕ヲ為サシム」と評されていたように、大地主は養蚕業に積極的であったが、製糸業については積極性が乏しかった。<sup>(1)</sup> しかし銀行業へは大いに関わっていたことが明らかになったのである。大地主が関わる銀行業の中で安房銀行は100株以上の所持者の占める比率が33.5%であって、大地主の関わり方も少なかった。<sup>(2)</sup> 他銀行が殆ど1株50円であったのに、額面20円を維持し続けた。また1908年の預金集約状況を見ると、15万4499円余で県下の銀行ではダントツの位置にあって、野田商誘銀行の3倍、佐原興業銀行の2倍以上であり、その内訳では農業から37.6%、商業27.7%で、佐貫銀行と共に地元の零細な農漁民や商人に根付いた数少ない銀行の一つであった。<sup>(3)</sup>

1899～1902年の間で株主名簿から県内居住者で200株以上の所持者を整理すると、121人の存在が確認出来る。安房銀行・小見川農商銀行以外は1株50円の額面であったから、彼らは10,000円以上の投資者であったことが分かる。配当率は最高1割5分から4分と色々であるが、年7分で計算すると、年700円以上の配当があったこと

になる。10代の製糸女工が額に汗して1日12時間働いた平均賃金が25銭であり、300日労働したとしても75円に過ぎなかったのである。産業革命期には格差が拡大して富めるものはますます富み、中央には三井や三菱に代表される財閥が、また地方には大地主を中心とする地方財閥が形成されていったのである。しかし格差が拡大する社会を放置することは人間社会にあっては決して望ましいことではない。日本においても1910年代末から様々な社会運動と結びついて格差是正への反撃が展開する。その一つの到達点が第二次世界大戦後の諸改革による格差是正であった。しかしそれらの課題は他日に期したい。

注)

- (1) 前掲『千葉県蚕業家名譽鑑』86頁。
- (2) 前掲県立文書館蔵「株式会社安房銀行第7期営業報告書」(1899年6月30日)
- (3) 前掲県立文書館蔵「株式会社安房銀行第貳拾五期営業報告書」(1908年7月)

付記、本稿は2008年5月に千葉県中小企業同友会主催「第1期同友会大学」と利根川文化研究会5月例会で報告したものを加筆・修正したものである。